

SATO Hirotaka

佐藤 弘隆

富山大学芸術文化学系助教

私の専門はメディアアートである。メディアアートは、コンピューター技術をはじめとする同時代のデジタル・テクノロジーを扱う芸術表現領域である。私はこれまで、家電や車といった既製の機械を改造し、機能を拡張したり他のシステムに置き換えることで、テクノロジーを通常とは異なる視点から捉え直すメディアアート作品を制作してきた。近年は、人工知能やオートメーションの普及に呼応する形で、自律的なシステムやジェネラティブ（＝生成的）な要素を取り入れた作品を制作している。以下にこれまでの研究制作活動を紹介する。

2016年に発表した「Neutral BUG」は、自動運転技術をテーマに制作した作品である。制作を開始した2015年は、自動運転技術の実用に向けた法整備が始まるなど、自動運転技術の実用化に向けた本格的な動きが散見された年であった。本作は、自律的な制御システムを搭載したラジコンカーを観客が操縦するインタラクティブなメディアアート作品である。実物大の廃車体の運転席をラジコンカーのコントローラーに改造し、車窓にラジコンカーが撮影した映像をリアルタイムに投影することで、体験型アトラクションのようなシステムを構築した。観客は、廃車体に乗込み、ハンドルやアクセルペダルなどを動かすことでラジコンカーを制御する。一方でラジコンカーは、環境データを収集するセンサーや独自のアルゴリズムに基づき自律的に動き出す機能を搭載しており、観客の操作を度々妨害する。これにより、制御するものと制御されるもの主従関係の反転が交互に繰り返されることになる。本作はインタラクティブ・アートでありながら、非-インタラクティブな瞬間を持つのである。AR（拡張現実）を参照した没入的なシステムは、操作を干渉された際の観客の身体感覚を拡張することを目的としている。ラジコンカーに与えられた自律性は、ジェネラティブな要素である。インタラクティブなシステムの中に、ジェネラティブなシステムを組み込むという手法は、その後も自作の中で継承されることとなった。

2019年に発表した「Buddhist Altar」は、仏壇に見立てた観音開きの大型冷凍庫の中で、仏像に見立てた氷

像を成形し、保存する装置である。氷像は、自然造形物である「氷筍」の発生プロセスを人工的に再現することで成形される。庫内天井部に設置したノズルからコンピューター数値制御によって可変量の水を滴下し、台座上で凍結させ、積層する。物質の相転移による造形プロセスは、熱溶解積層方式の3Dプリンターとも類似する。異なるのは氷の場合、常温で相転移が発生するという点である。本作では、鑑賞者が成形された氷像を鑑賞するには冷凍庫の扉を開けなくてはならない。扉を開けると外気が流入し、庫内温度が上昇する。また、扉の開閉を感知すると、大型のハロゲン投光器二灯が点灯し、氷像を照らす。投光器の発する熱は、外気の流入と相乗し氷像を溶解させる。鑑賞者の参加によって作品が破壊されるシステムである。しかしながら、一定の溶解をシステムが検知すると、氷像は再び成形される。破壊と再生を繰り返しながら、生物が新陳代謝するように、同一性を保つ仕組みである。こうした自律的制御による動的変化のプロセスも、ジェネラティブな要素である。

近年の自作は、作品の内と外という概念が強まっており、外部との対話（＝インタラクティブ性）と内部の自律的なシステム（＝ジェネラティブ性）の共存が作品のベースになっている。こうした構造は、自然や生物の在り方に類似している。



Neutral BUG
メディアアート・インスタレーション



Buddhist Altar
メディアアート・インスタレーション

